Special Feature
Reframing Japan by Insights Gained Overseas

Part 6

日本の資本主義はどこからきたのか

渋沢栄一とサン・シモン主義

Kashima Shigeru 鹿島 茂

「日本資本主義の父」渋沢栄一は、その異名どおり第一国立銀行や東京証券取引所など、多種多様な企業の設立・経営に関わり、抜本的な社会改造を経て日本に資本主義をもたらしたことで知られるが、そのアイディアはどこから来たのか。渋沢が出会ったフランス第二帝政期の社会・経済システムを見直すことで、日本における資本主義の知られざる起源を明かす。

経済史に埋もれた見えざる「糸」

フランス文学者である私がなぜ渋沢栄一に興味を持つようになったのかと尋ねられることが少なくない。

きっかけは1992年頃、電通総研の「企業文化研究会」で、C先生の渋沢栄一に関する発表を聞いたときのこと。C先生は、渋沢が近代的資本主義の基礎となる金融制度に開眼したのは、徳川昭武の随員（庶務・会計担当）としてパリ万国博覧会に赴いたさい、名誉総領事として一行の案内役となった銀行家フリュリ=エラール（Flury-Hérard オランダ風発音ならフロリ=ヘラルト）から手取り足取りで銀行、株式会社、公債、社債、株式取引所など金融システムを教えられたからであると解説された。

ところで、私は『絶景、パリ万国博覧会』を上梓したばかりで、フランス第二帝政の社会と経済に多少とも詳しくなっていたので、渋沢がフリュリ=エラールを介して学びとったその社会・経済システムというのは、サン・シモン主義のそれではないかと質問したのである。

するとC先生はサン・シモン主義についてはエンゲルスの『空想から科学へ』で知っている程度で、第二帝政でそれがどのくらい実現されたかということに関して自分はまったく知らないと正直に答えられた。私はこの答えに驚いたが、その後日本の経済史家やフランス史家の第二帝政理解の実態を知るに及んで、サン・シモン主義というものがほとんど研究の視野に入っていないという点においてC先生が例外ではないことに気づいた。

ひとことでいえば、1992年の時点において、日本の経済史家、フランス史家においては、マルクス主義の影響が圧倒的で、第二帝政およびサン・シモン主義に対する理解のレベルはけっして高くはなかったと言わざるをえないのである。

では、それなりに層が厚い渋沢栄一の研究者および伝記作者はというと、こちらはフランス語を解する人が少なかったこともあり、在仏中に渋沢が吸収した社会システムを研究し直そうという意識は希薄であった。渋沢が学んだのは「高度な資本主義」という通り一遍の理解を出ていなかったのである。

私はこれを知り、研究者としての意欲をかきたてられたのである。

というのも、渋沢が金融知識を獲得した第二帝政期においてサン・シモン主義の影響が圧倒的であったことが歴史的事実であり、また「資本主義の父」渋沢によって明治の日本に植え付けられた資本主義が他国では類を見ないような外部注入型のそれであったとするならば、この二つの事実の間に影響関係があると証明することは不可能ではないと思ったのである。

しかしその一方で、影響関係を「証明」するには地道な努力が必要であることも理解できた。AとBがよく似ているから、BはAの影響のもとにあると主張するわけにはいかないのである。なぜなら、BはAと全然関係なく、まったく別の経路によって結果的に「似ている」に過ぎないこともままあるからだ。

では、AとBの影響関係を「証明」するにはどうしたらいいのだろう？

それはAとBを結ぶ「糸」のようなものが存在することを明らかにし、その「糸」のからまり具合を解きほぐして影響が伝わった経路を明らかにするしかない。しかる後に、あらためてAとBに相似的な照応関係が認められるか否かを再検証することである。

しからば、この「糸」に当たるものはなにか？

それは、まず、渋沢に資本主義のシステムを教えたフリュリ=エラールということになる。フリュリ=エラールこそがキー・パーソンなのである。さらに具体的に問題点を絞るならば、フリュリ=エラールはサン・シモン主義者であったのかということになる。しかし、それだけでは完璧な証明にはならない。

というのは、たとえフリュリ=エラールがサン・シモン主義者で、サン・シモン主義的な社会システムを渋沢に伝授したとしても、もし渋沢にそれを受容・咀嚼し、自分なりにアレンジして日本の風土で実践する能力がなかったとしたら影響を受けたということにはならないからである。つまり、Aとフリュリ=エラールのほかに、渋沢とBとの「糸」もまた完全に解きほぐす必要があるということなのだ。

とはいえ、19世紀フランスの研究者のはしくれとして、フリュリ=エラールについて調べるには時間がかかりそうだという予感は十分に働いた。政治家や文学者ならば意外と調べはつくのだが、経済人となると歴史に残るような資料は極端に少ないからである。

そこで、研究の戦略として、まず渋沢から始めて、その延長としてフリュリ=エラールに至ることにして研究を開始したのである。フランスでフリュリ=エラールと邂逅するまでの渋沢の履歴は以下の通りである。

渋沢栄一の肖像

パリでサン・シモン主義に出会った頃の写真。洒落た洋装が目を引く。（所蔵／渋沢史料館）

渋沢栄一の海外体験

渋沢栄一は天保11（1840）年、武蔵国榛沢郡血洗島（ちあらいじま）（現在の埼玉県深谷市）に生まれた。生家は、農業のかたわら藍玉の製造販売を営む経営農家で、父親の市郎右衛門は地域の名望家として知られていた。栄一は、藍を栽培する農家との付き合い方など、経営農民としての生き方を幼いときから教えられながら育った。つまり、農民としてよりも、商人として経営学を父からたたきこまれたのである。

渋沢栄一に転機が訪れるのは17歳の頃のことである。領主の娘の結婚資金の件で、岡部の陣屋の代官に父親の代理として呼び立てられ、代官から500両の御用金の即答を要求されたが、父親の代理なので即答できないと答えたところ、代官にさんざんに面罵され、侮辱されたのである。この経験で、渋沢は士農工商という身分社会の矛盾を感じ取った。なにゆえに、あのような愚かそうな代官が武士であるというだけの理由で、それなりに学問を積んでいる自分を侮辱する権利を持つのか、それは社会の仕組みが間違っているからだと結論したのである。

「今日の代官とは初めて会ったのであるが、その言語と言ひ、動作と言ひ、察するに知識の無い男であると思われ

るが、斯様な人物が良民を軽蔑嘲弄するといふのは、お上の政治向きが悪いからである」（『青淵回顧録』）

渋沢は、これを機に尊王攘夷運動にのめりこんでいく。そのあげく、従兄弟たちと結社をつくり、横浜居留地の焼き討ちまで計画するが、この企てはすんでのところで挫折し、官憲の追っ手を逃れるために一橋慶喜の家臣となる。尊王攘夷運動の一方の旗頭であった水戸藩主・徳川斉昭の七男である一橋慶喜は徳川幕府の一員でありながら反政府勢力の期待も集めていたのである。

渋沢の目論見は、早晩、幕府は瓦解するので、そのときには一橋慶喜を押し立て雄藩連合を作ろうということだったのだが、一橋慶喜が第15代将軍になってしまったため、この日本改造計画は頓挫する。

そんなときに降って湧いたのが、徳川慶喜の弟・徳川昭武を名代とするパリ万博派遣団に加わるという話だった。かつては尊王攘夷の闘士だったにもかかわらず、渋沢はこの話を二つ返事で引き受けた。ひろく、世界を知り、身分差別のない新しい社会を築く方法を知りたいと思っていたからだ。

果たせるかな、1年半に及ぶ海外体験は渋沢に大きな衝撃と変化をもたらすことになる。その最初の衝撃は、開削途中だったスエズ運河を途中まで船で航行していたときに訪れた。紅海と地中海を結ぶ大工事が着々と進められている様を船上から眺めているうちに、その大工事が国家的事業ではなくレセップスという個人の発案に基づくスエズ運河株式会社という「法人」によって施工されていることに驚愕したのである。すなわち、個人個人の小さな金が株式というかたちで集められた結果、面前に見るような巨大工事が可能になったというそのシステム自体に渋沢は激しく興味をいだいたのである。

かくして、渋沢はマルセイユで一行を出迎えた名誉総領事の銀行家フリュリ=エラールを先生にして、株式会社の仕組みから始まってありとあらゆる金融システムについて学ぶことになる。フリュリ=エラールも、東洋から来た一青年があらゆることに好奇心を発揮するのに驚き、自分の知っていることをすべて伝授したようである。

と、ここまでのことはほとんどの渋沢伝に書いてあるし、渋沢も自伝で語っている。

第一の問題は、渋沢が1867年にフリュリ=エラールを介して摂取した社会・経済システムとは、本当に、ナポレオン3世治下において初めて可能になったもの、いいかえると、ナポレオン3世のブレーンとなった銀行家のペレール兄弟や経済学者のミシェル・シュヴァリエなどのサン・シモン主義者たちがシステマティックに、しかも短期間のうちに実行に移したそれだったのかということである。

この点については、歴史のイフを用いればすぐに明らかになる。すなわち、もし渋沢が1867年ではなく、1848年に渡仏し、フランスで社会・経済システムを学ぼうとしたと仮定すれば、すぐに答えは出る。不可能だったと。なぜなら、渋沢がフリュリ=エラールから学び取り、後に日本改造のモデルとした社会・経済システムは、1851年のルイ・ナポレオンのクーデター以前には存在していなかったもので、第二帝政になって初めて実現した特異なものであったからである。渋沢は、まさに、1867年にほぼ完成を見ていた特殊なサン・シモン主義的な社会・経済システムを、そのようなものとは意識しないまま、資本主義的な土壌のない日本に持ち帰り、短期間のうちに完全に開花させたということなのである。

だからもし、渋沢が出会ったのがサン・シモン主義でなく、たとえばイギリス流のレセ・フェールの資本主義であったなら、日本の資本主義がうまく開花したかは大いに疑問の残るところである。資本主義というのは放っておいても成立するものではない。そのことは自由主義経済に移行した後の旧共産圏の実態を見ればよくわかる。何もせずに自然に放置すれば、ブラック・マーケット型の社会になってしまうのである。

1867年、パリ万国博覧会に派遣された徳川昭武一行。後列左端が渋沢栄一。（所蔵／渋沢史料館）

サン・シモン主義とは何か

ではいったい、サン・シモン主義というのは、そもそもどのような社会・経済思想であったのか？

サン・シモン主義とはその名の示すごとく、アンリ・ド・サン・シモン伯爵（有名な『サン・シモンの回想録』の作者サン・シモン公爵の遠縁に当たる）が唱導した社会理論で、社会の富の根源は生産にあり、王侯貴族・官吏・軍人などの生産にかかわらない人間は社会に不要であるから、極力排除すべきで、産業人優先の社会を築くべきだとする思想である。そのキー・ワードは富の「流通・循環」にある。すなわち、社会が貧困状態に止まっている原因は、カネ、モノ、ヒトが流通・循環しないで一カ所に停留していることにあるとし、この三つの要素を流通・循環するようなシステムをつくることが不可欠であると説く。しかし、そのために政治体制を変える必要はない。王政だろうと帝政だろうと共和政だろうと、カネ、モノ、ヒトの流通・循環を保障するような制度を整備すればそれでよいのである、云々。

しかしながら、サン・シモン伯爵は、おのれの思想が実践に移される前に死去したので、運動は師の意思を次いだサン=タマン・バザールとプロスペル・アンファンタンらの高弟、すなわちサン・シモン主義者たちに受け継がれることになる。彼らは晩年に宗教がかって『新キリスト教』という著作を著した師にならって運動体を「サン・シモン教会（Église Saint-Simonienne）」と命名し、「教会」の指導者として「教父（ペール）」と「教母（メール）」を戴くことにするが、差し当たり「教母（メール）」に人材を得ないため、アンファンタンとバザールが二頭体制の「ペール」で組織を運営してゆくことになり、理論の精緻化のために機関誌『産業人』を、ついで機関紙『グローブ』（編集長・ミシェル・シュヴァリエ）を発行して社会改良の方法を次々に提案していった。

重要なのは、まず第一にカネを動かす銀行と株式会社を設立しやすくするような法律をつくり、政治によってこれをフル稼働させることである。なかでも銀行はサン・シモン主義の中核として位置付けられる。富裕階級から預かった金を国債と外債で運用するロスチャイルド銀行のような旧来型の銀行ではなく、未来を見据えた産業投資型のベンチャー・キャピタルが重視され、政府の信用貸与でこの手の銀行を多く設立することが奨励される。産業投資銀行は同時に小口の預金銀行でもあり、投資のための資金は民間から細流主義によってこれを集める。

第二はモノとヒトの流通・循環を加速する鉄道と港湾・船舶の整備である。これらのインフラ整備には莫大な資金が必要だから、銀行による間接融資だけではなく株式や社債による直接金融が不可欠である。よって、これらの証券の流通を促すための証券取引所を整備して大衆からの小口の投資を呼び込むようにする。第三はアイディアの流通を促すために万国博覧会を開催し、それぞれの展示コーナーにおいて優秀作に金・銀・銅のメダルを授与し、「より良く、より安く、より大量に」の競争を加速させる。

ただし、これらのシステムの確立・整備は官営ではなくあくまで民間のイニシャティブのもとに行われなければならない。しかし、労使対立のような利害関係が起こることが予想されるので、調整のために専門的知識を持つレギュレーター（調節者）の存在が必要になる。

ところが、このレギュレーターの問題を巡ってサン・シモン主義者は二つの党派に分裂することとなる。すなわち、レギュレーターはキリスト教の神父のような宗教的カリスマ性を帯びていなければならないとするアンファン

第2回パリ万国博覧会の会場風景。サン・シモン主義者たちによって統括されたこの万博は、第二帝政の象徴とも言われた。

タンの主流派と、宗教的感情よりも理性を優先すべしとするバザールらの反主流派の間で対立が起こり、これに自由恋愛の可否を巡るジェンダー問題もからんだことから、二つの党派は分裂の危機に瀕するのである。そして、1832年に風俗壊乱の疑いで官憲が介入したこともあり、組織体としてのサン・シモン教会は解体し、運動員たちはバラバラにそれぞれの専門分野で思想を展開してゆくことになる。

主流派のアンファンタンの党派は、不在の「メール（教母）」を求めてエジプトに旅立ち、紅海と地中海を結ぶスエズ運河の構想を太守（パシャ、高官）に働きかけようとするが不調に終わり、フランスに引き揚げる。この構想が後にエジプト大使だったレセップスによって実現したことは既に見た通りである。

いっぽう、バザールらの反主流派は銀行家のペレール兄弟を軸にして鉄道建設の運動を開始するが、七月王政下では運動に共鳴する人は少なく、鉄道建設は遅々として進まない。そんなときに、サン・シモンの著作に親しみ、社会改造を目標に掲げるルイ・ナポレオン・ボナパルトが大統領に当選し、1851年にはクーデターを起こして全権を把握したため、元サン・シモン主義者たちは、ルイ・ナポレオンのもとに馳せ参じるが、なかでも一番の厚遇を受けたのは、ペレール兄弟と経済学者ミシェル・シュヴァリエである。彼らは1851年の12月に皇帝ナポレオン3世として即位したルイ・ナポレオンのブレーンとなってサン・シモン主義的な社会改造を矢継ぎ早に実施してゆくのである。成果が上がるのは非常に早く、わずか数年のうちにフランス経済は劇的な成長を見せ、一気にイギリスを抜き去ることになる。ペレール銀行はロスチャイルド系の銀行と鉄道への融資合戦から金融戦争を開始し、やがてそれは巨大なバブルへと発展する。ナポレオン3世によって登用された剛腕のセーヌ県知事オスマンの主導で行われたパリ改造は、空前の不動産バブルを招き寄せることになる。またミシェル・シュヴァリエの唱導により1855年に開催された万国博覧会は産業構造の劇的変容をもたらし、農業国だったフランスはイギリスやアメリカと並ぶ工業国へと変身する。

いずれにしろ、ナポレオン3世の強権のもとに実施されたサン・シモン主義的社会改造プランは、格差拡大という痛みを伴いつつも短期間のうちにフランスを先進国のレベルに引き上げることに成功したのである。

師フリュリ=エラールの謎

さて、以上のサン・シモン主義的な「社会改造プラン」を読んだ現代の読者は、なんだ、「いまでは当たり前の社会インフラ投資理論ではないか？」と思うにちがいない。それもそのはず、第二帝政期にナポレオン3世のブレーンとなったサン・シモン主義者たちによって果敢に実行に移されたこうしたプランは、第二帝政崩壊でサン・シモン主義者たちが権力の座から遠ざけられた後も、ある意味、「匿名」で実施され、フランスを繁栄に導く。それと同時に、システムはこれまた「匿名」で外国に輸出され、世界中に拡散していったのである。そのため、後にはサン・シモン主義者たちによって第二帝政期に集中的に実践されたということに気づかなくなっているのだ。こうした「匿名」の、「そうとは知らぬ」最初の伝播者の一人がほかならぬ我らが渋沢栄一であったわけである。では、渋沢にそれを教えたフリュリ=エラールもまた「匿名」の伝授者であったのだろうか？

私が解いてみたかったのは、まさにこの問題である。というのも、渋沢がサン・シモン型の経済システムを学んだフリュリ=エラールが銀行家だったということまでは判明していたが、果たしてその銀行はサン・シモン主義的な銀行、いいかえるとペレール兄弟の「クレディ・モビリエ」型の銀行だったのかについては不明のままだったからである。「クレディ・モビリエ」系列ならば私の仮説にはまことに都合がいいが、もし、そうでないなら、仮説は頓挫することになる。

しかし、やんぬるかな、困難な探索のすえにフリュリ=エラールの子孫を捜しだし、フリュリ=エラールの銀行、すなわち「バンク・フリュリ・エラール」はどのような系列の銀行であったかを調べ上げたところ、結果はサン・シモン主義のペレール系の銀行ではないことが判明したのである。「バンク・フリュリ・エラール」は主に外務省の海外送金を担当していた銀行で、金融の系統樹では、「ソシエテ・ジェネラル」の系列に属する。ところで、「ソシエテ・ジェネラル」とは、ペレールの「クレディ・モビリエ」の成功に刺激されたロスチャイルドを中心とする反ペレール勢力が、「クレディ・モビリエ」に対抗するために作り出したベンチャー・キャピタルであり、預金銀行であったのだ。いいかえると、反ペレールであるという点においては、ソシエテ・ジェネラル系統のフリュリ・エラール銀行はサン・シモン主義銀行ではなかったということになるのである。

ところが、さらによく調べてみると、ソシエテ・ジェネラルの設立メンバーには、同じサン・シモン主義者でもペレールやミシェル・シュヴァリエなどのような離党派ではなく、サン・シモン教会の元代表者プロスペル・アンファンタンの系譜に属する銀行家や産業人、具体的にいえばリヨンの銀行家アルレス・デュフールやPLM（パリ・リヨン地中海鉄道）のバルトロニーやタラボなどが加わっていることが判明した。換言すれば、ペレール兄弟と異なる流れではあるものの、こちらもサン・シモン主義の銀行であることに変わりはなく、さらにいえば、本家のサン・シモン主義の流れに属する銀行ということになる。

というわけで、渋沢栄一は、フリュリ=エラールを介して、外部注入型のサン・シモン主義的社会・経済システムを学び、それを日本で開花させたのではないかという私の仮説は大筋では間違ってはいなかったことがわかったのである。

当時のサン・シモン主義者たちを表す風刺画（1830年頃）。産業人たちの相互扶助に基づく共同生活や平等思想が体現されている。

日本に資本主義を移植する

産業社会の基礎造りのために開催された万国博覧会に、偶然、徳川昭武の随員として参加した渋沢栄一は、当時、文字通り、唸りをあげながら稼働していたサン・シモン主義的社会改造の仕組みを「そうとは知らず」に学び取り、帰国後に、最初は大蔵省官吏として、次に国立第一銀行頭取としてこれを現実化することにより、日本を短期間のうちに産業化させることに成功した。その原点にあったのは、身分によらず実力によって出世できる機会均等の社会をつくることだったが、フランスで、渋沢はそのテコとなるべき原理をサン・シモン主義的な銀行と株式会社の中に見出したと信じ、それを日本で適用しようと思いたったのである。

では、なぜ渋沢は見事、成功を収めることができたのか？

思うに、成功の原因の第一は、社会改造のノウハウがサン・シモン主義的システムとして「パッケージ化」されていたことにある。だから渋沢が「そうとは知らずに」システムを日本にアダプトしても、ノウハウが確立されていたため、ただカスタマイズするだけでよかったのだ。

成功の第二の原因は、サン・シモン主義システムの成功のカギがレギュレーター（調節者）にあったことによる。フランスのサン・シモン主義運動はレギュレーターが宗教的カリスマ（アンファンタン）であるべきか、理性的合理主義者（バザール）であるべきかで決着がつかず分裂したが、日本では、渋沢という儒教的実践を内在化したレギュレーターが同時に合理主義者であったという幸運に見舞われたことが幸いしたのである。

この意味で、「日本資本主義の父」と呼ばれる渋沢は、より正確には「サン・シモン主義的社会・経済システムの、日本における父（ペール）」でもあったのである。

Kashima Shigeru
1949年横浜市生まれ。仏文学者。東京大学大学院人文科学研究科博士課程修了。現在、明治大学国際日本学部教授。専門は19世紀フランス文学。著書に、『馬車が買いたい！』（サントリー学芸賞受賞）、『職業別 パリ風俗』（読売文学賞評論・伝記賞受賞、いずれも白水社）、『渋沢栄一（上・下）』（文春文庫）、『フランス文学は役に立つ！』（NHK出版）、『ドーダの人、小林秀雄』『ドーダの人、森鷗外』（いずれも朝日新聞出版）など多数。